

跡芝遺跡出土の縄文土器について

—縄文時代中期の千曲川最上流域へのアプローチ—

芹沢 一路

報告の経緯

今回取り上げる資料は、過去に自宅敷地内で発見されたものを、2001年に、土地所有者である木次孝氏から北相木村考古博物館に寄贈されたものである。コンテナボックス2箱ほどの土器片があったが、今回はその中でも残存率が高く独自の特徴を有し、当地域の土器編年を考える上でも、今後重要な意味を持ち得る大型の土器を紹介してみたい。

跡芝遺跡について

跡芝遺跡は、北相木村のやや西方に位置する。村中央を流れる相木川に、小河川カワト沢が流れ込む付近で、その合流地点を臨む南向き斜面の狭い平坦地にある。標高は約980m。眼下には、主に縄文中期の遺物が表採されている宮ノ平遺跡がある。

尚、1998年に発掘調査がなされ、やはり中期土器の発見が多い坂上遺跡は、本遺跡から上流約1.5kmに位置する(図1)。

土器の詳細

本資料(図2・3)は大小18ある土器破片が接合され、底部以外の口縁部から胴部までの様子をとらえる事ができた。器形は口縁部がわずかに内湾し、胴部がゆる

やかに反っていく深鉢形土器である。なお、接合できない部位不明の同一個体片が1つあった。土器の内側は丁寧に成形がなされており、胴部下半に焦げ痕が見られる。次に文様構成を見ていきたいと思う。

口縁部は口唇部にかかる様に隆帯を付け、先端を「つ」の字状もしくは紐形状にしている。それを、頸部との区画になっている刻み目がある隆帯と繋げて楕円状の区画を作り出している。また、口唇部に付けた隆帯を左右からせり上げて、紐状の粘土塊を包むようにして波状突起を形成する。その波状突起に逆U字状の刻み目のある隆帯を付ける。また、それらの区画された内側を沿うように三角押引文を充填していく。

頸部では先ほど述べた刻み目のある隆帯の脇を沿うように横方向の角押文を施し、さらにそこから縦方向に数条の角押文が施文される。また、角押文で楕円区画をつくり、その中を縦方向の三角押引文を充填する。一部には楕円区画に沿うように隆帯が付いている。

胴部は、欠損部が多く全体の様相が判別がしにくい。胴部上部は隆帯で三角区画や不定形な区画を配し、隆帯に沿う様に角押文や三角押引文を施文される。一部であるが舌状の隆帯を見る事ができる。観察できる部分が少ないが、胴部下部も隆帯での区画がされ、それに沿って角押文が施文されている。さらに縦方向の三角押引文と、横方向の結節沈線が施文されている。なお、三角押引文は3条で一組での施文がなされている。



図1 跡芝遺跡位置図

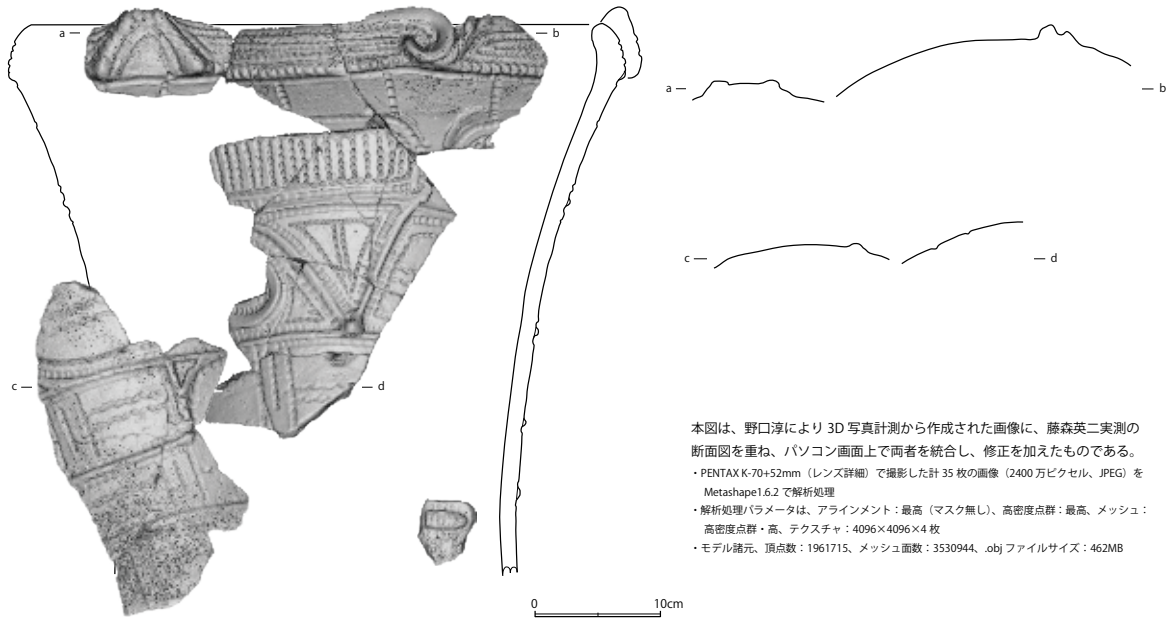


図2 跡芝遺跡出土土器 (S=1/6)

次に本資料の特徴を整理してみる。

- ①区画内を三角押引文の多用する 口縁部と頸部の区画内に三角押引文が多用されている。口縁部は横方向に、頸部は縦方向に施文されている。同じ様に三角押引文が多用されている土器は、梨久保遺跡(岡谷市)112、115住、荒神山遺跡(諏訪市)103住、程久保遺跡(原村)14住、大石遺跡(原村)21住、22住、比丘尼原遺跡(原村)6住、寺所第2遺跡(北杜市)T-11住等で出土している。
- ②頸部の縦方向の角押文 頸部に間隔をおきながら縦方向に角押文が施文されている。同じ様な施文がなされている土器は、坂上遺跡(北相木村)、大石遺跡(原村)22住で出土している。
- ③角押文と三角押文による区画 頸部では角押文で楕円区画文を形成する。また、胴部にみられる3条1対の縦方向の三角押引文は、外側の2本は横方向の角押文に被る様に施文がなされており、真ん中の1本は短く角押文に被らないよう施文がされている。外側の三角押引文は、あたかも横方向の角押文と一緒に区画を形成する様な意図を感じる。そしてその区画内に結節沈線を施文している。

なお、接合する事が出来なかった土器片にも同じような施文が見られる。

本資料は、横方向に楕円形等の区画文が連続する点や、隆帯に沿って三角押文が施文されることから勝坂式土器、井戸尻編年でいうところの新道式土器の要素が強いと考えられる。また、これより先行す

る貉沢式期である坂上遺跡出土土器(図4)とは、口縁部と頸部を区分する刻み目のある隆帯、頸部の空白部分への縦方向の角押文が共通する。上記の特徴から本資料は、貉沢式土器の特徴を残す古い時期の新道式土器であると思われる。また、③で触れた様に法則性のある三角押引文と結節沈線の施文は、この土器の大きな特徴であると考えられる。

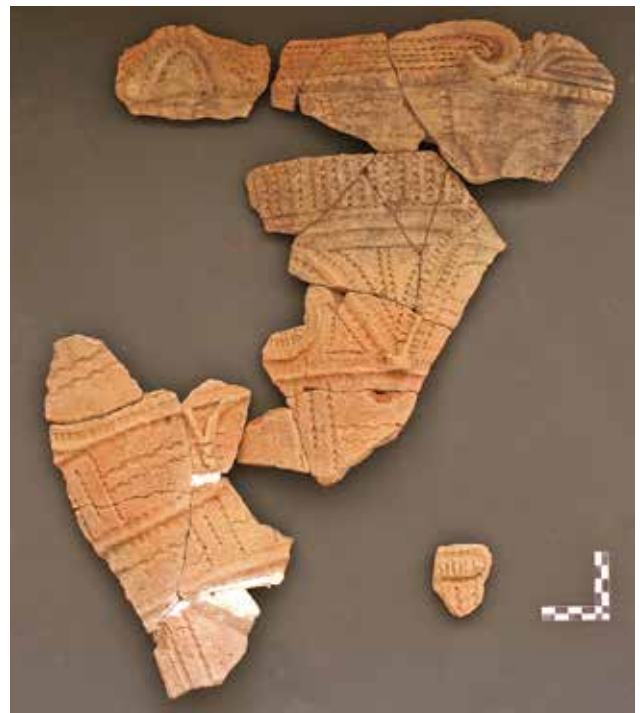


図3 跡芝遺跡出土土器(写真)

考 察

本資料が採集された北相木村がある長野県の東信地域は千曲川上流域に位置する。当地域の縄文時代中期中葉期は、後沖式土器や焼町式土器といった在地系の土器が主体となる独自の編年が組まれている（寺内2004、桜井2012、藤森2013等）。東信地域を代表する中期中葉の遺跡として滝遺跡、明神原遺跡（共に長和町）、久保在家遺跡（東御市）、川原田遺跡（御代田町）、後沖遺跡、寄山遺跡（共に佐久市）等が挙げられる。これらの遺跡は、後沖式土器や焼町式土器を主体としながらも、勝坂・井戸尻式系土器、阿玉台式土器、北陸系の土器が共存する様相を示している。一方で、千曲川最上流域である南佐久郡域（北相木村を含む）においては、東信地域独自の土器が見られつつも、旧白田町以北の下流地域とは異なり関東や山梨方面との強い繋がりを指摘する意見もある（藤森2019）。今回は一資料のみを取り扱ったが、跡芝遺跡からは他にも中期中頭や勝坂・井戸尻式系土器、阿玉台式土器が表採されている（図5）。また、北相木村では、他にも資料化されていない土器がある。今回紹介した土器を含めた、これらの資料を調査研究していく事によって、千曲川上流域におけるモノやヒトの交流の様子を浮かび上がらせる事が出来ていければと考える。

主な参考文献

- 桜井秀雄 2012「東信地域における縄文時代中期の様相」『長野県考古学会誌 143・144 合併号』長野県考古学会
- 寺内隆夫 2004「千曲川流域における火焰土器および曲隆線文の系譜」『火炎土器の研究』新潟県立歴史博物館
- 寺内隆夫 2012「土器装飾に差異の顕在化と中期文化の繁栄」『長野県考古学会誌 143・144 合併号』長野県考古学会

- 藤森英二 2013「東信地域における縄文時代中期土器の動態」『文化の十字路口信州』日本考古学会
- 藤森英二 2019「相木の谷の縄文時代中期土器について」『北相木村考古博物館 Vol.02』北相木村教育委員会
- 釈迦堂遺跡博物館 2001『縄文デザインの不思議抽象文土器の世界』
- 長野県立歴史館 2014『平成26年度冬季展縄文土器展デコボコかざりのはじまり』
- 岡谷市教育委員会 1986『梨久保遺跡』
- 北相木村教育委員会 2000『坂上遺跡』
- 東部町教育委員会 1992『久保在家遺跡 - 不動坂遺跡群Ⅲ・前村下り遺跡・古屋敷遺跡群Ⅲ・加賀田遺跡群緊急発掘調査報告書』
- 長門町教育委員会 2001『滝遺跡』
- 長門町教育委員会 2001『明神原・桑木原遺跡』
- 長野県土地開発公社・佐久市教育委員会 1995『寄山・寄山古墳・中条峯・勝負沢』
- 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1975『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 茅野市・原村その1、富士見町その2 -』
- 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1976『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 諏訪市その3 -』
- 原村教育委員会 1995『程久保（第1・2次発掘調査）・恩膳西（第3次発掘調査）遺跡』
- 原村教育委員会 2005『比丘尼原遺跡（第2次発掘調査）平成13年度県営圃場整備事業柏木地区に先立つ緊急発掘調査報告書』
- 御代田町教育委員会 1997『川原田遺跡 縄文編』



図4 坂上遺跡出土土器（S=1/8）



図5 跡芝遺跡出土の中期土器群